

## 舞姫が私たちに伝えていること

私はこの作品を読んでいくつか疑問が浮かんできた。その疑問とは、話の終わりがあまりにも悲しすぎる結末だったのはなぜかということ、また豊太郎は作品の中で「近代的自我」に目覚めるのに、どうして自分の選んだエリスという道を全うすることが出来なかったのか、ということである。ただ舞姫は悲しい話だった・・・という事ではなく、これらの疑問を解決していき、舞姫を書いた時の作者の心情、時代背景を踏まえた上で、作者は私たちに何を伝えようとしたのかを知りたいと思い、このテーマにした。

私は、作者はこの作品を通して自我を持つことの葛藤と、それを打破する強い意志（しつかりした決意があり、それを実行させる力）を持つことの大切さを伝えていると思う。

## 豊太郎について

豊太郎は「近代的自我」を持ちえることができ、エリスと恋に落ちるのだが、結局は相沢、伯に流されて、エリスをドイツにおいたまま日本に帰ってしまう。私はこれが疑問だった。どうして豊太郎は自分の道を切り開こうとしたのにできないまま終わってしまったのか。まず、時代背景に触れておきたい。

この作品は、明治23年、(1890年)に書かれた。この時代は、江戸から明治へ移り、さまざまな社会の変化があった頃である。この頃の若者は「立身出世」を目指す若者が多かった。大きな変革を迎えていた明治時代には自分の能力によって上の階にのし上がることが可能になった。そこに必要なのは、勤勉、忍耐、知識学問であり、そうした修養によって身を立てる（立身出世）は人間として価値のあることであると考えられていた。こうした時代背景があり、豊太郎は「我が名を成さん」「我が家を興さん」とドイツに留学したのである。このようにこのころの人々はまだ自分の思うように行動したいと思うような自我がなかったように思われる。そのような環境では自我という考え方は生まれなかっただろう。豊太郎もその一人で、国からお金をもらって留学しているし、政府や家族などの外からの圧力によって自分の歩む道を決められてしまっている。

このような背景から、国民は政府のために働かなくてはならないし、何より「立身出世」の思惑があったから、簡単には自分の思いどおりに行動できなかった。豊太郎はそこでやっと手にした「自我」なのにどうしてその道を全うできなかったのだろう。そこで、私が一番大きいと思ったのは、豊太郎に意志が足りなかったところである。「自分の信じている人には深く考えずに即答し、それが成し難いと気づくとそれを隠し実行する」といったところや、それを後悔して「ああ、なんと無貞操な心か」としていることから、豊太郎はどうも意思が弱いように感じられた。また今まで人がしいたレールの上を歩いてきたのも、自分の弱い心が明らかにならないようにするための予防線のようにみえる。このように豊太郎には、このような自分の意志を貫き通す力がなかったように思えた。その意志があればエリスにしても自分の出世にしても、自分の思うようにできたはずだと思った。

### 相沢と豊太郎の関係

私は、相沢はこの小説の中で、豊太郎の母のような役割をしているように思われた。豊太郎の母は、豊太郎とエリスがいよいよ仲良くなってきた、という場面で亡くなってしまう。それではもう、エリスと豊太郎の仲を裂こうとするものはいなくなってしまう。相沢は自分の出世と豊太郎のために豊太郎を日本に戻し、エリスと離れた。この相沢のことを豊太郎は「相沢謙吉がごとき良友は世にまた得難かるべし」と感じ、されど、と続けて「我が脳裏に一点の彼を憎む心今日まで残れりけり」と思っている。この「彼を憎む心」はエリスと分かれなければならなかったこと以外に、自分のやりたいように自由に行動したかったという豊太郎の気持ちが表れている。この時代、出世の道に戻してくれた相沢を憎む感情はありえないはずだ。しかしこのような考えが出てくるということは、豊太郎は近代的な自我に目覚めていたということ、そして強く独立したいという気持ちとそれがかなわなかった無念さがよく表れている。このように相沢は豊太郎の母と同じで「立身出世」の道つまりいままで豊太郎を自我などない世界へ戻すための役割を担っている。こうして、豊太郎にとって大きな存在であった母がいなくなっても、異国の地であっても豊太郎を自我とそれを抑えこもうとする力の中で悩ませ続けるのだ。

### 鷗外と豊太郎の関係

この二人の共通点はとても多い。この小説は鷗外のドイツでの留学を元に書かれたのはまちがいない。また、鷗外はドイツで外国人の女性と恋に落ちる。その女性は鷗外を追って日本に来るが、鷗外の家族によって追い返されてしまう。それなら、自分と同じ悲しい終わりにしなくてもよかったのではないか。では、鷗外はこの小説を書くことで何を表そうとしたのだろう。豊太郎の回想が鷗外の経験をもとにしたものなら、鷗外は自我に目覚めていたととれる。それが全うされなかったと綴ると豊太郎を書くことで、鷗外は社会や家族に向けて反抗しようとしたのではないかと思った。そして鷗外は「立身出世」の世の中で、自我とそれを達成するにはどうしたらいいのか私たちに問いかけているのだ。

### まとめ

わたしは鷗外がこの小説を書くことで、私たちに自我（自分の進みたいと思う気持ち）と、周りからの圧力との中で生まれる葛藤を表そうとしたのではないかと思った。この話は明治時代に書かれたものだが、今の私たちにも通じるところがある。例えば、親から独立しようとしたときや、自分で自分の道を決めようとするとき、私たちは自分から進みたいという気持ちと、誰かや何かに依存したいという気持ちから動けなくなってしまう。そのときに強い意志が必要になってくるのだと思う。豊太郎にとっての母や相沢つまり自我を抑さえ込む圧力と、エリスとの恋が表している、自分の思うように進みたいという気持ちがこれらのことを表しているのだと思った。そして今の私たちにも言える、一步を踏み出すための意志が必要なのだと示唆しているのだ。明治時代という政治も考え方も不安定だったからできたこの舞姫という作品は、自分は何を選択してどう生きていこうか考えさせられる名作であると思った。

